

師言、不敢忘德、及其貴、不知禪師處、是時禪師年尙壯、懷南遊求法之志、附海舶入太宋、留者二十年矣、月潭慕禪師德、以待其東歸、然而年久、不可記其面、故路置且過堂、問僧往來、果得禪師、於是勸法雲寺、敦請禪師、爲開山始祖、其後自天建法林寺、追崇禪師、復爲之開山祖、

〔明良洪範〕^三内膳[○]兵家事、初メテ秀賴公ノ御近習トナル時、祿一萬石ト成リ、京極修理亮、朽木兵部少輔ナド、官祿モ同ジカリシ時、相州小田原進發ノ時、京極氏家、朽木三人同道ニテ關東ヘ下リケルニ、江州草津ノ驛ニテ宿ノ者ヲ呼ンデ、酒ヲ吞セテ戲ムレテ、此三人ノ内何レガ殿下ノ御意ニ叶ヒ立身スベキヤト、其方目利シテ盃ヲサスベシト云シニ、亭主初メハ辭退シケルニ、三人頻リニ望ミシカバ、其時内膳ガ前ニ盃ヲ出シテ申ケルハ、近キ内ニ貴公様御主人ノ御氣ニ叶ヒ、必桑名ノ御城主ニ成リ給フベシトテ盃ヲサシケル、案ノ如ク小田原陣中ニテ、大閣ヨリ桑名ノ城ヲ内膳ニ給ハリ、五萬石ヲ御加恩セラレシト也、

〔白石紳書〕^六盧一官といふ唐人の子、長崎町人にて年行事也、是がいひしは、父の所へ唐人共の來りし時、天草の四郎が十二三にて、唐人の供に雇はれ來りしを、唐人の中にて相をつくぐと見て、名を問ひ父を問ふ、濱の町といふ所の者の子也、通事不審に思ひて尋しに、彼唐人云、日本は心得ぬ所也、あの如くなる者、あのごとくなる賤役を執てある也、彼子は天下に望のある者也、されど運はやき程に、望は成就すまじき歟といふ程なく有馬の戰の事おこりたる也と、

〔先哲叢談〕^三熊澤伯繼[○]中略

嘗至某侯、及入見、一士人威儀特秀、骨體非常、相與張目注視良久、遂不交、一言見侯曰、余今見一士、不知仕臣乎、將處士邪、侯曰、渠爲吾講兵書、處士由井民部助者也、^{名正}雪 蕃山正色曰、余熟視其貌以察其意、君勿復近如彼士、他日正雪亦來見侯曰、前日比退朝、見某衣其形人、未知其爲誰、侯曰、渠說吾以經書、岡山臣熊澤次郎八者也、正雪正色曰、余熟視其貌以察其意、君勿復近如彼士、